DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

東方着衣ぶっかけ合同

～めんこい女子にゃそのままかけろ！～

G's Entitled 2
base hit!
ごたさんのエンタイトルツーベース

もくじ

ドリアン(カラーイラスト)……4
誤汰吉(漫画)……6
てぃんばー(漫画)……13
定宏(漫画)……15
ダイチ(漫画)……19
保留中(漫画)……22
ひっつ(漫画)……26
カワシ(漫画)……30
あず(漫画)……32
五郎丸(漫画)……34
るぅる(漫画)……40
奈津みかん(漫画)……44
いとひろいち(漫画)……48
大型熊猫(ノベル)……54
hoyohoyo(ノベル)……58

あとがき……66

描いた人：誤沈吉

世は世紀末。
着衣から聖液を吸収、力とすることのできる呪いが
発現した東風谷早苗……

熱心かつ性欲の強そうな若い信者を見つけては、
秘密の行いに没頭していく……

こんにちは！

ようこそいらっしゃいませ❤

特別ご奉仕メニューははじめての方ですか？

そうですか！よくぞ今日まで信仰いただきました❤

それでは、特別ご奉仕メニューへご案内いたしますね❤

大丈夫です、怖いことはなにもありませんから❤

心ゆくまでご堪能ください❤

それでは早速始めさせてもらいます❤
まぁ立派❤
じゃあまずはお口でしてあげます❤
びん♥
どす
びん♥
どす♥

ほら❤

うわぁ……❤ おっぱいにいっぱい射精てる❤

びゅーっ❤

びくんっ

びくっ❤

びゅっ❤

ほらほら❤

びゅっ❤

どくんっ❤

おっぱいの重さをしっかり味わってくださいね❤

あはは❤

びくんっ

どろ……❤

いっぱい射精ましたねぇ❤

見てください❤

べと

お……❤

どろ

おっぱいべとべと❤

べと❤

よしよし❤
まだ元気ですね❤
びくっ❤
びくんっ❤
一発だけじゃ終わらせません❤
え？なんでこんなに元気なのかって？
びくっ
びくん
ちゅ❤

決まってるじゃないですか❤
もちろん
そういう仕掛けがされてるんですよ❤

なので、思う存分イってくださいね❤
しゅっ❤
しゅっ
ついでにイキやすくもしてありますので❤
ささ、しっかり射精してくださいね❤

ぶくん
ぶくん
ぶくん
ぶくん
ぶくん
ぶくん
ぶくん
ぶくん

こんなにいっぱい射精して……
もう体中べとべとですよ❤

でもまだ……

ぞくぞく❤

射精、できますよね❤

fin.

はぁっ！
はぁっ！
で、出るッ!!
ジュッ
ジュッ
ぬえちゃん
マジシコシコ!!
ウッ!!
ドロォ
あ～……
服着たまま
だったから……
いや、
これはこれで……
正体を、隠せば……

……？なんか臭わね？

ん～？

……？なんの臭い？

なんか……

栗の花っぽい……？

あの娘から……？

モヤモヤするあーくそ分かんね

な～んか知ってる気がするんだけど……

――ああ

これはこれでクセになりそ♡

皆が帰っても宇佐見は起きない時がある。

俺は時々そんな宇佐見の寝顔を盗み見ていた

その日も俺は同じように寝顔を見ていた

はずだった。

出来心だった。

放課後スミレコキャンス

定宏

ゴ

う、宇佐見……。

好きだ。好きだよ。

ん♡

ばっ♡

(は)

(い)

宇佐見の口柔らかいよ……。

にゅ

ちゅ♡

ダイ!
ダイ!
へぁっ?
お……ちんちん?
いやぁ!
うわっ!
宇佐見っ射精るっ!

こ、これは
その……。
どいて。
う、宇佐見
その……。
何？
お、俺
宇佐見のこと
好きで……。
こんなこと
しちゃったけど
よかったら……。

宇佐見っ！
ごめん
射精
とまんないっ！
ぱぱ
ぱぱ
ぴゅっ
ぴゅっ
ぴゅっ
ぴゅっ
完

は？見抜きさせてほしい？

やろ。

嫌だよ

えっ!?

はー

まったく…私の住処まで来てなんの頼みかと思えば…

ほら早く帰って…っておい！泣くことはないだろ!!

うう…

だって…だって…

あーもー！

パタン

まったく世話の焼ける…

ほらこれでいいか？

ぐっ

ナズーリン様あああああああああああっ!!

ぱっ

ぱっ♥

うう…なんか私まで
変な気分になってきた…

ドキ♥
ドキ♥
シコ
シコ
シコ
キュン♥
キュン♥

最近まで忙しくて
そんな暇もなかったし…

この匂い…
頭の中が
クラクラしてくる…

むわぁ
ストン
ストン

ちょっとだけ…
ちょっとだけなら…

ビクッ
れろぉ♥

この味…
癖になりそう…♥

な、ナズーリンッ…!?

ちゅっ♥
ちゅぅ♥
ちゅぅ♥
ちゅぅ♥
ちゅぅ♥
ちゅぅ♥

あ…♥
おちんちん
ビクってしてる…♥

ぢゅるるる♥
ビクッ
ビクッ

あっ…!
強く吸っちゃ…!!

もっと刺激
してやるっ♥

はっ♥
はっ♥
ぱっ♥

出るっ！

ドピュッ

すごっ…
いっぱい出てる…

びゅっ
びゅるるる♥

たぱっ♥
たぱぱっ♥

うわ…
全身ドロドロだよ…

ぐちゃ

ごめん…

ぬちゃ…

ぐぢゅ

まったくだよ
服もこんなに汚して…

きちんと責任…
とってくれるんだろうね♥

ぺろっ♥

おわり♥

服に精子かけさせてほしい？

えっ？ちょっと何言ってるか

ボロン

なんでもう準備万端なの!?

急にこんなとこに呼び出して何の用？

お願いって何なの？

描いた人保留中

土下座するしなんでもするって

言われちゃうとちょっと弱っちゃうなぁ

ムニ

ムニ

ドキ

ドキ

なんでさっきからずっとほっぺたおちんちんで突いて来るんだろう

じぃ

大興奮だ！

はぁ

シュッ

はぁ

シュッ

はぁ

シュッ

うわぁ
あんなに強くこすって
痛くないのかなあ？

私本当に
座ってるだけでいいの？
いいならいいんだけど

本当にこのまま
受け止めるの？
わかった・・・

わっ

ビクッ

ビクッ

びゅるるる

ビクッ
ビクッ
ビクッ
はっ
ぜクッ
どゅるる
ねちゃねちゃだ・・・
うわぁ・・・
にちゃ♡
にちゃ♡
ドキッ♡
ドキッ♡
んべ
ネチャ
どろぉ〜〜〜♡
こんな感じでいいのかな？
ポタ
ポタッ
いやもう一回は流石に
ビキッ
大興奮だね！

うわぁ・・・
お尻とかにもかけるんだ

いやまあ着替えるだけだからいいんだけど・・・

ひゅっぐっ

どゅるるる

ひゅぐっ

ふぅん
そういうのが好きなんだ

にち
にち

にゅちゃ

あはは・・・
脇にもかけるんだ
しかもこすりつけて

ぶるぉ〜

これで最後だからね
もう絶対に次はないからね♡

お願いしたら
なんだかんだ
またやってくれました

はぁっ……

ぐぐ……

んっ……

ふぅっ♪

毎朝のことですが
産卵は
疲れますねぇ……

ん？

産卵久侘歌ちゃん
大ピンチ!!

ひらっ

あなたたちっ――

レディーの産卵を覗き見とはっ――

変態!!

変態!!

人間のクズ!!

地獄に堕ちろ!!

バレちゃった

どうする?

ちょっと聞いてます!?

ちょっ

バレたし

こっちくんな……

しかたないね

何人いるの!?

キャ――!!!

犯される――!!!

大丈夫です安心して!!

自分ら久侘歌さまのファンなんで!!

ちょっとシコってブッかけるだけなんで!!

イクッ
俺たちの想い
受け止めてくれっ
あなたたち——
最っ低ですっ——

は～い みんな～
お待ちかねの おりんりん ランドだよ～
これまで 頑張ってきた君も まだまだの君も
おりんりんランドに 挑戦してみよう！
!!
ボロン
ビクン
ビクン
あはは もう 準備万端だね
ギシャッ
でも私は 甘くないからね
みんな心して 掛かるように ね
グッ
じゅぷ
じゅぷ
じゅるる
じゅぷっ
なんだいみんな 全然堪え性 ないじゃないか
……あ
じゅっ
ビュル
ビュル
ビュル
ビュル
ビクン
ビュッ
ビュッ
びちゃ
ビュル
パシャ
パシャッ
ビクン
ビュル
ビュル
ビュル

服も汚れちゃったし もう一回チャンスあげるね

ほ～ら頑張って！

あたいはみんなが頑張る姿もっと見たいな～

ビクッ ズリ ズリ ビクッ

パサ

グイ

ビクッ ビクッ

びちゃ ドロ

ビュル

ビュル

ビュル

ピュッ

ドロ…

ビクッ

ビクッ

ビクッ

あれれ？君たちは昨日の子だよね？

また夜の森に迷い込んだの？

それともまたシて欲しいの？

ホー

ホー

あははっ最近の子供はスケベだね

親御さんは心配しないのかー？

だ、大丈夫…

こっそり抜け出してきてるから…

ふ～ん

肝が据わってるどころじゃないね

近いうち凶暴な妖怪に喰われて死んじゃうよ

ま、わたしは君たちがどうなっても別にいいんだけどねー？

あっ

あっ

あっ

あっ

あっ

なで

なで

しっ

しっ

私は君たちを殺して食べると怒られるからさ

新鮮で濃厚な精をいただくだけで我慢してあげるよ

昨日の夜と同じくね❤

はー…

はー…

ビクッ

ちゃ

ちゃ

ちゃ

ちゃ

ビクッ

あっ

あっ!!

おねえちゃん
僕も…僕も…

はいはい
順番順番

あっ

あっ

ぷはっ…❤そろそろ日が
のぼってきちゃうから
今日はここでおしまいっ

また夜に来てね
同じ場所で待ってて
あげるからさ♪

むわっ♡

はーっ♡

はーっ♡

えぇっ…まだ
もっといっぱい
したいよぉ…

だめだめ、ちゃんと帰って
精を溜めて来てくれないと

チュン

チュン

チチチ…

精液の濃い子には
もっとイイこと
してあげるから❤

ぷゆるっ♡

ひゃ

ぽーっ

ああ

ごめん
こいしちゃんっ

あーえっと

ねとぉ…

気にしなくて
いいよ全然

くぱぁ…♡

それよか
ほら♡

キミならもう
イケるでしょ

♡
♡

とろみ…

挿れて♡

ハッ♡
ハッ♡

どきっ♡
どきっ♡
どきっ♡

にゅる…

ぬぷ

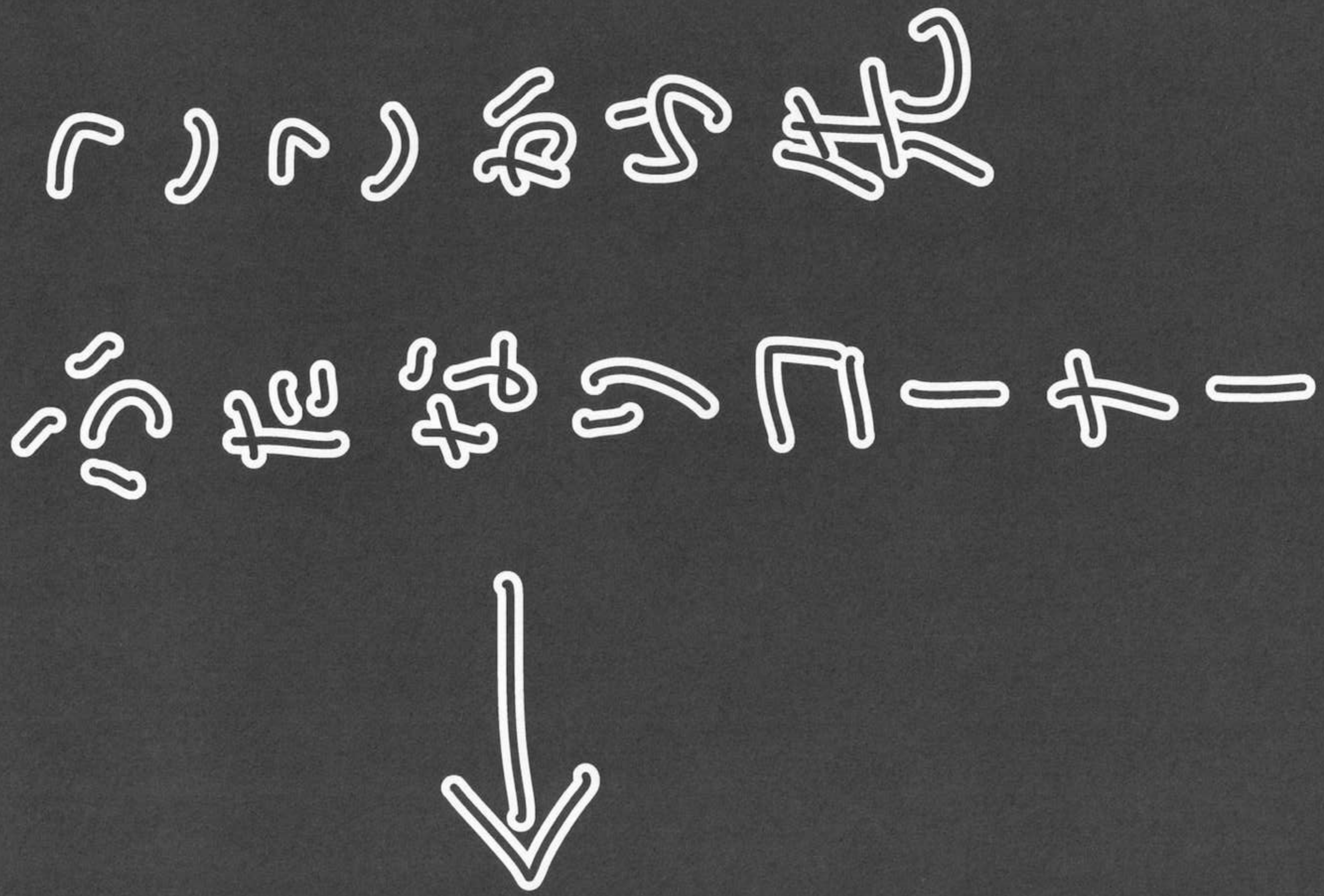
ぷっ♡

んっ♡

ぱちゅぱんぱんっ
ちゅ♥ちゅ♥
れろ♥れろ♥
ぎゅうう
あ♥あッ♥ん♥はッ♥あ♥
にゅるにゅる♥
ずちゅ♥
こいしちゃんっ
もっもうっ
イク？
はあ♥はあ♥
ぷるるるる♥

ペ3
…すごいね キミ
オナニー覚えたてくらいのコなら何回シたって疲れ知らずで
た〜〜〜〜〜っくさんせーえきぴゅっぴゅしてくれるかなって思ってたんだけど…
期待以上だったな♡
…ねえキミ
あたしのペットにならない？
おしまい。
PET END…

Illusted by 誤汰吉



紅魔館の図書館

おーい パチュリー…

ガチャッ

今日も本何冊か借りに来たぜ～ …って…

ドロ

…なんだこりゃ？

スライムか？

いや、もしかするとコイツは…

ス…

!?

もしかしなくても私の精液よ

魔理沙

ぱ、パチュリー…

ーで、今日は本を借りに来たと。

あ♥

ああ。でも来ておいてなんだが今回は遠慮しとくぜ…

イヤな予感がする。

別に良いのよ？

今回は…そうね、ぶっかけさせてくれたらね？

い、いや、だから今回は遠慮するって…

それでも良いわよ？

私は遠慮しないでぶっかけちゃうけど♥

いくわよ…？
ちょっ
ぷあっ
ぐちゅ
ぐちゅ
ぐちゅ

ん…はぁっ…♥
良い感じに精液塗れで
ドキドキするわね…

な…何が
ドキドキだっ…
おえっ

大変でしたね…
魔理沙さん

…あ?
い、いたのかよ、
気づかなかったぜ…
小悪魔

ま、まぁ良いですけどね…
私、魔理沙さんが
来なかったらさらに
ぶっかけられて
どうなってたか…
ボッ
ボッ

ーで追加なんだけど
本選んだあと
このまま帰って
欲しいわね

精液塗れで帰ってる
魔理沙を
想像するだけで
かなり良い
オカズになると
思うの♥

おう
黙れや

描いた人：奈津みかん

みすち軒

ガコッ

「こわすな！」

おっとっと

アルバイト
900円/h～
16:00～
24:00は
2割増

の本日の
みすちーおススメ
もつなべ
AZソフ

何時だと思ってんだ

今すぐ帰らないとぶちゅ

みてみてー♡

ちょんまげ

ぶへへっ

ぶいぶいっ

ぼるん

べちゅっ

すみまぜん

でじだぁぁぁっ

ぐいっ

ズイ

へっ？

あ、あの・・・？
ナニをする気で？

そんなにちかすけないで・・・

ほらこっち向いて
動かないでね・・・
ちょうど
溜まってたんだ♡

ぷるっ

ぷるっ

ぷるっ

ねばい・・・！あのっっ！！！
開けてください！うわっぁ♡
ちょっと！！！こんな格好で
帰れないですよ！！！

むわっ

せめて
シャワー・・・

そう？ザーメントッピング
似合ってると思うけど？
そのままライブ
やったらどう？？

ルナサ

嫌です！！！

ガチャ
ガチャ

服の中まで
ベトベト・・・

ねっぱあ

ぐちゅ
ぐちゅ

朝になって日が昇ってきたねー♡
早く帰らないと誰かに
見つかっちゃうけどいいのかなー？

リリカ

じゃぁもう一泊してく？着替えはないから
そのまんまで過ごして
もらうことになるけどね♡

メルラン

もう何でもいいから！
はやく中にいれてください！！

えっちナカに？
（わくわく）

お師匠様ぁ～♡

ムラムラしてきたのでヌイて下さいなぁ♡

僕もお願いします～♡

お師匠様♡気持ちよくさせてください～♡

ニヤ

ニヤ

ニヤ

ビッ

ビッ

ぬぅ…またなのかお前たち…っ

お師匠様ぁ～はやくぅ～♡

おててやわらかぁーい♡

あっ♡

ドキッ

ドキッ

ドキッ

ドキッ

こらっ里乃は余りそれをこっちに近づけるでないっ

わかったわかった…すぐに気持ちよくするから待っててな…っ

こいつら最近…性処理を私に頼みすぎだろ…

ぎゅっ♡

ヒクッ

ヒクッ

ヒクッ

あっ♡ お師匠様のおててとても柔らかくて気持ちいいですわぁ♡

あんっ♡!!!

お師匠ーさま♡ すごくいいですぅ♡♡

あっ♡ 射精しちゃう!!!♡

んっ♡ こっちもでるっ♡♡

うう…

うう… 臭いのに… 感じちゃう…!

こいつら射精しすぎだろ…

ねぇお師匠様?

僕のおちんぽを…

しゃぶってくださいなっ♡

!?

むぅ…
ドキッ
ひくッ
チラッ
ひくッ
うぅ…これも里乃のため…
仕方な…
ビクッ
あ～ん…
ドキッ
えいっ♡!!!
ひくッ
ひくッ
!?
ガポッ!!
お師匠～っ♡
私の方も弄ってくださいなぁ♡
ビッ
ビッ
空いてるおててでねっ♡♡♡
あっあっ♡
ビクッ
ビクッ
モニュ
モニュ
モニュ
んっ♡
ビクッ
やんっ♡
サワッ
ううっ…お口に里乃の匂いが…
ビクッ
ビクッ
グポッ!!
グポッ!!
ドキ
ドキ
舞の玉の感触がっ…
いっぱい精液作られちゃいますわ♡

ひうっ♡
ブシュ
でちゃうよぉおおおお!!!♡♡♡
ドプッ
ビクビクッ
ゾクッ
ドロ
こいつら…っ射精しすぎだよ…
ビクッ
あっ…だめだ…
ビクッ
堕とされちゃう…♡
ビクッ
息がっ…♡
ビクッ
げーほんとだぁ♡
ドキ
ねぇ里乃？お師匠様堕ちちゃったみたいだよぉ～♡
ドキ
なら這い上がれないようにもっと堕としちゃおっか♡舞いいよねっ♡
里乃は鬼畜だなぁ♡
ピュッ
ピュッ
ゾクッ
ひくッ
ドプッ♡
ゾクッ
ひくッ
ぶるるるぶるるるぶるるる

ずぴゅ
……
どぴゅ
どくんっ♥
どくっ♥

「」「」あゃ出

ヘぐさ冂ーナー

↓

ふたなり慧音と妹紅の熟年カップルは たまにはアブノーマルに着衣ぶっかけしたい

1.

多忙。

里の外で妖怪が暴れる事は日常茶飯事。妖怪が人を襲い、人は妖怪を退治する。それが幻想郷の日常である。

さりとてそれはあくまで「里」の外の話。幻想郷における里は特別な力を持たない人間たちが住む場所である。

空を飛んだり、時を止めたり。そんな能力に憧れこそすれ与えられた平静を享受するただただ平和な日々を謳歌する。そんな民草の集まりだ。長い目で見れば凪いだ平和な生活。だが暮らす人々にとっては時化もあれば嵐もある。上白沢慧音にとっては最近の日々は『荒れた』日常だった。

「疲れた……」

溜息混じりに慧音は呟いた。

村人との三つの会合を終えて村はずれの自宅に戻ったのは既に夕方に差し掛かろうかという頃だった。

度重なる天変地異。人々の間に広がる厭世観何をしても人間の未来など変わらないという閉塞感。そんな状況を調査し対策する日々。

ほうほうの体で自宅に戻った頃、台所から「おかえり」と朗らかな声が聞こえた。

声の主は藤原妹紅。

すらりと伸びた背丈と真っ白な髪が特徴的な少女。真っ赤なズボンと白いカッターシャツの組み合わせは何処かおめでたい外見だと思う。

彼女は慧音を居間に座らせると勝手知った る他人の家と言ったふうで、てきぱきと調理する。出てきた食事は冷や飯に漬物を乗せて出汁を掛けただけの簡素なもの。だが疲労を感じている慧音にとっては胃に優しい料理だった。

慧音を見遣り妹紅は

「お疲れ」

と小さく声を掛けた。労いの感情を伝えるために言葉を飾る必要はない。

二人は黙々と料理を口に放り込んでいく。夕餉が終わり、出涸らしのお茶を慧音の湯呑みに注ぐ。

「ありがとう」

妹紅と慧音の間に会話は少ない。

だが二人の間が疎遠である事を意味しない。長く連れ添った二人にとってため息一つでも感情を読み取る事できるようになっていた。

ふと窓の外を眺めれば太陽が沈むにつれ暗闇が広がっていた。慧音は差出されたお茶を口に含む。

「もう外が暗いな」

「夏至を過ぎたからね。これから日没時間を間違えて迷う里人も増えるだろうけど」

「そうだな…」

その時慧音は少しだけ逡巡する。

ゆっくりと手を伸ばし、妹紅の袖を小さく引く。

「妹紅……今日は泊まっていかないか」

これは合図。妹紅への逢瀬の誘い。奥ゆかしい慧音は言葉で欲情を伝えない。

「わかった」

妹紅も小さく頷く。

2.

「はっ、はっ、はぁ！」

「んっ……んっ……んぅ……！」

暗闇の中で二人の影が絡み合う。

規則正しい吐息が室内に響く。

慧音の股間には子供の腕ほどの陰茎が聳え立っていた。だが妹紅の膣口は難なく慧音の肉棒を受け入れている。

慧音は妹紅を布団に押し倒した正常位のまま大きく前後に抽挿を繰り返す。

薄暗い和室の中に二人の喘ぎ声が響く。

「も……妹紅…っ！」

「いいよ……来て。出して……」

やがて部屋の中に反響する水音が大きくなる。慧音は挿入した肉棒で子宮の入口を責める。

こを擦り上げれば快感を与え、妹紅を絶頂に導く事が出来るか慧音は理解していた。

「うっ！　出る……っ！」

深く肉の奥に突き刺した肉棒から白い奔出があふれ出る。

タイミングを見計らったように妹紅も身体を震わせ絶頂に達した。慧音の腰に両足を回しがっちりと下半身を固定する。絶頂に達した妹紅は陰茎を膣奥に固定して膣内射精を促した。

妹紅はお腹に両手を乗せ、吐精するたびにびくりびくりと震える肉棒を膣壁越しに撫でた。

「ん……きょう、いっぱい出てる」

射精し終わった肉棒は徐々に柔らかくなっていったが妹紅の膣中で名残惜しそうにゆっくりと前後運動を繰り返した。妹紅もぐっと下半身に力を込めて膣を締め上げる。

「すまない……今、抜くから」

芯が抜けた巨大な肉棒がずるずると妹紅の膣から引き抜かれると出口を求めた大量の精液がどろりと零れ落ちる。ぽっかりと開いた膣口からドロドロとした白濁液が止めどなく流れ出していた。

「んっ……けいねの……あふれてる」

布団と身体の間には数枚重ねた手拭いが慧音の粘液を受け止めていた。

二人は数えきれない逢瀬でどれほど汚れるか把握している。妹紅は慧音以外のペニスを受け入れた事はない。それでも耳に入った噂をふまえると慧音の精液はたぶん多い。というかずっと多い。

「今日はたくさん出たね。溜まってた、かな？」

「う……最近忙しかったからな」

ここ数日は村人との会合につぐ会合で性欲を処理する事も出来なかったようだ。妹紅は手拭で慧音の陰茎を拭った後に自らの下半身を拭った。溢れ出した精液が妹紅の指を濡らす。

（あっ。慧音の、精液……）

白く濁った精液を指先に乗せ妹紅は鼻を近づける。つんとした匂いが鼻をつく。

汚いもののはずなのに妹紅は慧音のザーメンを拭う事なく見つめてしまっていた。

「ごめん、妹紅。精液ついちゃったな。今拭いてあげるから」

そういうと慧音は手拭いで妹紅の指先を包み込む。

「あっ……うん。ありがと」

無意識に残念そうな表情を浮かべる妹紅。その事を自覚した時に彼女は赤面し慧音に気付かれないために布団へ倒れこむ。

慧音も射精した脱力感から妹紅に並んで布団へ倒れこんだ。

「眠い慧音？いいよ……今日はもう寝よう」

「うぅ……ん。ごめん、ごめんな妹紅」

どうして謝るのだろう。

静かな寝息を立てる慧音の頭を優しく撫でる。

妹紅も慧音の隣に並んで眠気がくるまで慧音の寝顔を眺めていた。

3

がさごそと物音が聞こえた。

部屋は薄暗いが窓の外から薄明りが差し込んでいた。

「ごめん、起こしちゃった？」

「んっ……気にしなくていい」

眠気に負けそうになる瞼を開くとそこには既に着替えを終わらせていた妹紅が佇んでいた。

白のカッターシャツと赤いもんぺのようなズボンをサスペンダーで吊っている。いつもの妹紅の姿だった。銀髪のロングヘアーは薄暗い室内でもはっきりと認識出来る。

「……」

「慧音？」

慧音は頬を赤らめて上気しているようだった。ぎゅっと強く妹紅の袖を握る。

妹紅は察するように慧音の傍に座る。

「昨日足りなかった？」

何が、とは聞かない。慧音の股間から男性器が服の上からでもはっきりと分かるほど屹立していたからだ。昨日は倒れるように眠りについた慧音にとってまだ出したりない、といったところだろう。

「うん……」

慧音はこくりと頷く。いつもは大人びたような顔に見える慧音だが妹紅の前では少女のような顔を見せる。村人の前では誰よりも大人であろうとする上白沢慧音は一人の恋人の前では幼

い少女に戻る。
「口でする？」
ふるふると首を横に振る。
「妹紅……に……たい」
「え……何？　聞こえない。言いづらいの？別に隠す事ないから何でも言ってみてよ」
慧音は妹紅に小さく耳打ちする。
「かけたい」
「？」
「妹紅にかけたい」
かける？　何を？
妹紅は困惑した。ナニを？かける？
「えっ？　……嘘」
妹紅は察する。慧音はうずくまりながら股間を手で覆った。
沈黙。
「ごめん、気持ち悪いよね。ドン引きしたよね！　忘れて！　お願い……」
慧音は必死に顔を隠しながら弁解する。だが妹紅や優しく慧音の手を握って顔から手を離すと優しく唇を重ねて口づけした。
「どうして、って聞いてもいい？」
それは優しい声。
「服着てる妹紅が可愛くて……」
ぽつぽつと慧音は語り始める。それは愛の告白だった。
「妹紅と肌を重ねるのは好きだ。優しく抱いて妹紅が感じてくれるのは嬉しい」
矢継早に慧音は続ける。
「でも」
「でも？」
「それでも普段の一方的に汚したい、そんな感情が湧き上がってくる。ドロドロに汚して、匂いをつけて、誰にも触れられないように独占したいんだ」
「……」
「ごめんねドン引きしたよね今の……忘れて。お願い」
慧音は瞳に涙を浮かべながら哀願する。
自分の性癖を打ち明けるのはどれほど躊躇しただろう。どれほど困難な告白だっただろう。そんな告白を打ち明けられた事はどれほど貴重なことだっただろう。
「いいよ」
「えっ……？」
「かけても、いいよ」
「服借りるから。お風呂場なら汚れても……いいよね」

4.

二人は風呂へ移動する。
薄暗い浴室は普段は檜の香りが溢れている。だが今日に限っていえばそれ以外の匂いが狭い空間に充満していた。
「んはぁ……すご……これ」
とろんと蕩けた瞳で妹紅は慧音の屹立した陰茎に鼻を近づける。大きく息を吐いた後にペニスから漂う淫臭を深く吸い込んだ。栗の花のようなすえた匂いが鼻孔を通り脳を刺激する。普段肌を重ねるだけでは嗅ぐ事がない、今は私しか知らない慧音の秘密の匂い。
妹紅は舌先を尖らせると慧音の鈴口をほじくるように舐め上げる。
「お……っ！あぅ！」
慧音は堪らず嗚咽に近い嬌声を上げる。
妹紅は人間に比べ長く生きているだけあって人間以上に性戯には長けていた。
舌先で慧音のペニスを濡らすと人差し指と親指で輪っかを作ると慧音の亀頭を扱き上げる。
じゅるじゅると妹紅の唾液が潤滑液となり慧音の亀頭に刺激を与える。
妹紅は慧音の肉棒を優しく扱きながら絶えず口から唾液と垂らす。とろとろと透明な液体がペニスの先端から竿を流れ根本の陰毛まで伝わっていく。
矛盾しているがようだが慧音のセックスは真面目だった。性欲の発散でありつつも恋人とのコミュニケーション。それはあくまで相互の快楽のための行為。自分だけが気持ち良くなってはいけないと思い込んでいる節が慧音にはあった。だが今この瞬間は慧音が一方的に快感を感じている。妹紅はただただ快楽を受け入れる慧音を見ると下半身が疼いてくるのを感じていた。
（慧音が……私ので感じてくれてる）

嬉しさのあまり妹紅は慧音の肉棒を喉の奥まで咥えこむ。

声にもならない音が喉の奥から漏れる。まるで獣のような唸り声。どこかで聞いた音だと思いながら妹紅はは思い当たる鳴き声に思い当たる。

発情した雌猫。そうだ、発情期に雄猫を求めるような鳴き声。子供の腕ほどもある巨大なペニスを喉に挿入しながら発情した牝声を吐き出す自分を想像して妹紅は嗜虐心に囚われる。

腰を深くつき出しながらぐりぐりと子宮を押しつぶすようなペニスの動きに興奮を感じ、ただただ苦しいはずなのに愛しい人のいちばん大事な部分を丸飲みしている優越感を覚える。

「うっ…！　ごめっ……いったん抜くっ！」

そう言うと慧音はずるずるとペニスを妹紅の喉から引き抜いた。慧音の下半身、特に陰毛にはびちゃびちゃとした唾液が付着している。妹紅は少し残念そうに屹立したものを口から離すと慧音の腰を抱き寄せて先ほど離した肉棒に頬ずりする。

「……ん、残念。出してくれてよかったのに」

口の周りの泡だった涎を小さな舌でぺろりと舐めて妹紅は呟く。

慧音は一瞬だけ逡巡すると真っ赤に赤面した。

「ごめん。慧音に……出したかったから」

視線を上げて慧音の顔を見遣る妹紅。その視線の先には困ったような嬉しそうな複雑な表情をした愛しい恋人の顔があった。そんな顔を見てしまうと妹紅などんな変態的な行為ですら受け入れてしまいたい欲求に駆られてしまう。

「いいよ」

小さく呟く。

大股開きの慧音の前に膝立ちで座る妹紅。既に浴槽内は二人の股から溢れる匂いが混ざりあい、それだけで発情を催してしまうほどの匂いだった。

そそり立つペニスに両手を添え、ゆっくりと上下する。そのたびにまるで射精するようにびくびくと慧音の男性器が震えだす。

必死に射精を堪えているのだろうか。彼女顔からは悦びの表情は消え、歯を食いしばって妹紅が与える快感を必死に堪える慧音。妹紅はそんな慧音の表情を見ながら擦り上げる速度を変えていく。慧音は足に力を入れ、ぎゅっと妹紅の方を掴んで必死に射精を我慢する。

荒い息遣いだけが二人だけの空間に反響する。

「いっぱい、だして」

囁くような声。

その瞬間、慧音の男性器から大量の精液が迸った。

甘い声に導かれるように堪えに堪えた欲求を妹紅にぶちまける。

慧音の身体の中にどうしてこれだけの精液が入っているのだろうと思う程の大量の射精。

びくりとペニスが震えるたびに白い粘液が妹紅の髪、顔、上半身を汚していく。

（けいねの精液……熱い。びくびくするたびに精液がでてる。）

時間にして数十秒。だが精液を浴びている妹紅にとっては長い長い恍惚とした時間だった。

「すごっ……せーえき重い。どろどろ……すごいにおい」

とろんと蕩けた瞳で慧音を見上げる妹紅。どろりとした精液が頬を伝いスカートに垂れる。

「慧音……見てて？」

「妹紅？」

妹紅は鼻先に浴びた白濁液を指に取り、口の中に運ぶ。濃厚な慧音の味が口の中に広がる。

身体の外側も内側も慧音に犯される悦びを感じて妹紅は身震いした。

「嬉しい。今日の慧音は全部晒け出してくれた。いつも私を気にかけてくれるのは嬉しいけどたまにはワガママになってもいいんだよ」

「妹紅……」

彼女の言葉を聞いて慧音はまた股間が厚くなっていくのを感じた。

「んっ。また慧音のおっきくなってる」

妹紅は慧音の耳元に顔を寄せて小さく呟いた。

「また……ぶっかける？」

妹紅は紅潮する慧音の頬に小さくキスをした。

終

妖夢と幽々子が放課後にぶっかけ遊びをするだけ。

hoyohoyo(小説) 鳴海也(イラスト)

キーンコーンカーンコーン…と東方学園に鳴り響くチャイムの音。
校舎の奥、放課後の教室には2人の人影以外は誰もおらず、校庭で部活動に励む部員の掛け声のみが聞こえる。
学校指定の紺色セーラー服と同じ色のプリーツスカートを身に纏い、白のスカーフを付けた少女たち。彼女たちはお互いの身体を抱き締めながら唇を交わしていた。

「ようむぅ…んんっ」
「ゆゆこせんぱい…」

魂魄妖夢と西行寺幽々子は恋人同士。2つ違いの先輩後輩の仲からいつしかお互い惹かれ合って、今はクラスメイトにも知れ渡る程の仲になっていた彼女たちがあっという間に肉体関係を持つのは当然のこと。
「あふぅ…。妖夢、今日は…ね?」
「はい、その為に『準備』してきました…あんっ」
「ふふふ、可愛い娘」

唇を離すと唾液が糸を引いてぷつん、と切れる。
外の陽の光に照らされ、頬を少し朱色に染める2人。

若い2人はお互いの身体を貪ることを止めはしない。
両親が居ないときの家で、放課後の学校で、さらには誰も居ない公園で。
特に『ハマって』しまったのは今着ているセーラー服姿での情事だ。綺麗なセーラー服姿でお互いの体液に塗れて戯れたり、色々な道具を使って汚しては乱れたり。
この前は教室の机の上で妖夢の身体を拘束して、幽々子の精液をたっぷりシリンジに詰めた浣腸液を彼女の腸内に注ぎ込んだ挙げ句、スカートの上から電動マッサージ器プレイをして半ば彼女を壊してしまった程だ。

そんな遊びが、やめられない。

「幽々子せんぱいの『ココ』、もうこんなに大きく…」
妖夢は幽々子の胸に顔を埋めながら上目遣いで彼女の顔を見る。片手はスカートのある部分をなぞりながら、その部分をだんだんと大きくしていく。
「だって、今からすることを想像しただけで…おかしくなりそうなんだもん」
甘い吐息を付きながら幽々子は軽く嬌声を上げる。

そして幽々子の紺色プリーツスカートの股間部分が不自然に盛り上がり、まるでテントが張ったかの様になってしまった。それはまるでペニスが勃起しているかの様に…というか、言葉通りに勃起している。

そう、彼女はいわゆる『両性具有』、つまりふたなりだ。恋人の妖夢と一緒になってからはエッチの時は女性器だけでなくペニスも使って彼女を悦ばせる。
そして今日もまた、妖夢の為に。

「はぁ…この日の為に、2週間も我慢したのよ?」
少し撫でられただけで、盛り上がったスカート生地の先端からぬるぬるとした液体がどんどん染み出していく。
「えへへ、嬉しいです…。おち〇ちんも『早く出したい』って催促してるみたいですよ?」
「もう、妖夢のいじわる」
頬をぷくっと膨らませてちょっとだけ拗ねる様子を見せる幽々子を見て、妖夢は再びその唇を奪う。
「ああ、うん…」
舌を絡めてくちゅくちゅと淫らな音をさせて、名残惜しそうに唇を離す幽々子と妖夢。
そのまま妖夢は女の子座りのポーズで床に座ると、愛しい恋人の下半身をじっと見つめながらごくり、と生唾を飲み込む。彼女はプリーツスカートの上からでも分かる位にギンギンに勃起した幽々子のペニス付近に顔を近づけ、スカート生地の膨らみから染み出していくカウパー液の香りを堪能する。
「ああ、すごく、濡れてます…」
妖夢は情欲に塗れた表情で濃紺色に変色したスカート生地からとろり、と糸を引きながら床に滴り落ちていく液体を指先で優しく撫でる。
そして指にたっぷり絡んだ蜜を自らの口に入れて上目遣いで微笑む。

「今日は、私を…精液塗れにして、壊して下さいね?」

前からセーラー服姿の妖夢を自分の精液で塗り尽くして壊したい、と思っていた。
でも彼女がどう思うかが分からなくてずっと我慢をしていた。

しかしこうやってお互いの身体を貪っていくうちに自分の欲望が抑えられなくなってしまった。嫌われたらどうしようと思ったけども、妖夢は私の言葉に笑顔で答えてくれた。

『良いですよ？私を…魂魄妖夢を、幽々子せんぱいの色に、染めて下さい』

実はその言葉だけで私は、イッてしまった。
妖夢という媚薬に取り込まれ、もう私は逃れられない。

「すごい…いつもより、大きいです」
妖夢はカウパー液塗れのスカートをずらしてぶるん、と飛び出すペニスに顔を近づけ、その先端を舐める。
「だって、妖夢にこれからエッチなことをしちゃう、って思っただけでこんなになっちゃったんだもん」
「えへへ…。好きですよ、幽々子せんぱい」
嬉しそうな表情を浮かべながら妖夢は少なくとも17～8センチはあるペニスを口の中に入れていく。
じゅるじゅる、と唾液とカウパーの混じった音が口内に響いた瞬間に幽々子が悶えてしまい、彼女の口から甘美な喘ぎ声が漏れる。
「あはぁ！ようむの、おくち、蕩ける…！」
「ふぁあいれふよ？（早いですよ？）」
ふー、とひと息入れてから妖夢はゆっくりと自分の頭を前後に動かし、ぐぷぐぷと喉の奥に当てる勢いでフェラチオを開始していくのだ。

「あん、ああ、あふんっ！」
彼女は腰を無意識のうちに動かし、妖夢のぬめる口内と自分の弱い部分を的確に苛める舌に成すすべも無く愛撫されていく。
ぽたぽた、と含み切れなかった唾液とカウパーの混じった液体が口から零れ、スカートに滴り落ちていった。
「んん、んふっ、ぐふっ」
ぐっぽぐっぽと淫らな音を立てて、両手は幽々子のお尻を中心に抱き締めるかの様なポーズを取り、身体ごと前後に動かしていく。
「はうぅぅ！ようむの、おくち、ま〇こ、気持ちいいよぉ！おかしくなっちゃうぅぅぅ」
幽々子の淫靡な喘ぎ声に妖夢はさらに自らの身体を動かし、苦しくなるのも構わずにさらに喉の奥までペニスを押し込む。
（すごく苦しいけど…幽々子せんぱいのお〇ちんに犯されてると思うと、それ以上に幸せ）

妖夢はそう思いながらも自らの動きを止めることはせずに、むしろますます激しく幽々子のペニスを犯す。きっと自分の為に綺麗にしてくれたのだろう、恥垢ひとつ無い一物からはほのかに石鹸の香りがする。それでもカウパーから滲み出てくる男性の臭いに妖夢自身が蕩けていくのが感じられた。
その太いソーセージを彷彿させる彼女のペニスを自らの舌を使って一番弱い部分を攻めて、さらにディープスロートをしながら彼女の快感を一気に引き上げる。
「やぁっ！それ以上苛められたら、私、せーし出ちゃうぅ！」
腰をガクガクさせながら幽々子は淫靡なメスの表情を浮かべつつ、自らのペニスを妖夢の顔から離そうとする。
その様子に妖夢は『ぷわっ…』と口から怒張した一物を離し、今度は右手でそれを激しく扱く。
「幽々子せんぱい…もうイキそうなんですね」
「うん、これ以上弄られたら、もう駄目…」
両手で顔を押さえてイヤイヤとまるで幼子の様に駄々をこねる幽々子の姿を見て、妖夢は小悪魔っぽい微笑みを浮かべると同時にその手をさらに激しく動かしていく。
「良いですよ？私に…魂魄妖夢に、西行寺幽々子せんぱいの、ザーメン…かけて？」

「やだっ…そんなこと言ったら…！ああ、だめ、イク、出ちゃう、ようむに…出るぅぅぅぅ！」
妖夢の台詞に反応してしまった幽々子の身体中を絶頂感が駆け巡っていく。大きく震えた彼女の身体、そして一瞬ぶくり、と膨らんだペニスから2週間溜めていた精液が一気に噴き出した。
びゅくっ！ぶびゅっ！びゅるるるっ！
そんな擬音が相応しいレベルの量の精液が妖夢の顔に、紺色のセーラー服とスカートに降り注ぐ。幽々子のペニスがまるで暴れ馬の如く震え、彼女の身体をあっという間に白く染めて上げてしまう。
「ああ、幽々子せんぱいのザーメン、熱い…あ、イくっ」
妖夢も軽く身体を震わせると、白く染まったスカートの中からぷしゅっ、という音をさせて、自らも潮を噴いたのだった。
艶のある髪の毛も。
幼さを残すも整った顔も。

皺一つ無い、綺麗な紺色のセーラー服も。
崩れひとつない、整った白のスカーフも。
汚れ一つない紺色のプリーツスカートも。

全てが幽々子の精液で白く、染められていく。

時間にしては10秒程度だったのだろう、しかしお互いにとってはまるで何分も絶頂に達した様に。
はぁはぁと荒い息を付いて幽々子は妖夢を見る。全身を精液に塗れさせた妖夢は自らも絶頂に達したのか、スカートの裾から蜜がまるでシロップの様に糸を引きながら床に落ちていく。
そして手に付いた精液を自らの口に含み、美味しそうに舐めて自分を見つめる彼女の姿に幽々子の心臓がどくん、と高鳴る。

「ゆゆこせんぱい…嬉しいです」

だめだ、がまんできない。
先程出したばかりのペニスは再び、大きくなった。

「今度は、背中にもお尻にも、ザーメン下さい…」
床の上で四つん這いになって幽々子に愛液で濡れたプリーツスカートごとお尻を向ける妖夢。まだ精液では汚れていないが、丁度彼女のお尻の部分を中心に濃紺色に染まっていて、それがまた情欲をそそらせる。
可愛い顔をして口からでる『ザーメン』の文字に幽々子は無意識のうちに自らのペニスを扱き始めていた。
「妖夢・・・貴女の、着ているセーラー服をぐちゃぐちゃにして、良いかしら?」
変態じみた発言の幽々子の言葉に妖夢は顔を振り向けて、一言。

「いいですよ…?このセーラー服も、幽々子せんぱいのザーメンでいっぱい汚して、下さい…んんっ!」
再び全身をびくん、と震わせる妖夢…どうやらまた絶頂に達してしまったらしい。
そんな彼女の姿に、幽々子が我慢出来るはずも無く。

「ああ、ようむの、そんなエッチな姿を見たら…イク、また、イクぅぅぅ!」

激しくペニスを扱きながら幽々子は大きくひと震え、ふた震え。
びゅっ!びゅっ!という音と共に先程と大差無い量の精液が妖夢に降り注ぐ。髪の毛から背中のまだ綺麗な紺色の部分、そして濡れたスカート。
全てが、全てが幽々子の精液で染まっていく。

「止まらない…止まらないっ!」
まだ出る、止まらない精液が妖夢だけでなく、自分のセーラー服にも掛かっていく。
「ああ、出る…おしっこ、出ちゃう!」
激しく吐精しながら自分の女の子の部分も絶頂に達してしまっているのが分かる。
そして同時に緩んだ尿道から自らの檸檬水がだらしなく漏れていくのが感じられた。
「あああ…出てる、いっぱい、おしっこ、出てるぅ」
空いている片方の手で『わざと』お尻の部分のスカート生地を押さえておしっこを染み込ませていく。そう、自分の着ているセーラー服も自ら汚していく…その快感もさらに彼女の性欲を高めるのに一役買っていた。

「すごい、背中越しでも幽々子せんぱいのザーメン、熱い…!」
きっと背中もお尻も凄い量の精液が掛かっているのだろう、妖夢はそう感じながら自分のメスの部分がぐちょぐちょに熟れていくのが感じ取れていた。
何度も幽々子の精液を浴びる度に自分も軽い絶頂を味わっていく。
でも、足りない、まだ足りない。
幽々子せんぱいのザーメン、私の『膣内(なか)』や『腸内(なか)』にたくさん注いで欲しい…!
妖夢はそう思いながら嬌声を漏らしていた。

「幽々子せんぱい…いつもの様に、下さい」
ほんの数十分前はいつもの綺麗なセーラー服が今は精液と自らの愛液で見るも無残な姿になっている。それでも彼女の魅力は崩れることなく、むしろさらに淫靡さが漂っており、この姿を見た男性はまず間違いなく襲ってしまうだろう。
ただひとつ違うのはその姿を見せるのは目の前の恋人だけ、という点であるが。
そんな妖夢はもう前も後ろも白く染まってしまった、かつては汚れひとつ無い紺色だったプリーツスカートの裾を持ち上げ、ひくひくと疼く菊穴を幽々子に見せ付ける。

お互い授業が終わった後の、明日も着るかもしれないセーラー服姿…。
それはある意味裸でセックスをするよりも魅惑的で背徳的な恰好だった。そんな淫らなメスに堕ちてしまった彼女の姿に幽々子はごくり、と生唾を飲み込んで再度大きくなった自らの男性器をゆっくり彼女のお尻に当てていく。

にゅぐ…ぐぐっ

「あ、はうっ…！」
何度も入れられている幽々子のペニスだが、やはり最初の挿入の時は若干の抵抗に少しうめき声を上げてしまう。愛液と精液が潤滑油になってもやはりこの瞬間だけは慣れないものだ。
(でも、幽々子せんぱいのだから、受け入れられる)
そう、妖夢の菊穴を犯して腸内にペニスを挿入して良いのは幽々子ただ一人だけ。
そして幽々子の男性器を受け入れる度に妖夢はその苦しさも悦びに変換されていくのだ。

「はぁ…！よーむの、おしり、すごくキツくて…すぐ、イッちゃう」
「駄目ですよぉ…もっと、私を、楽しんでください…！」
その言葉を皮切りに幽々子の腰がにゅぐ、にゅぐ、という音を立てながら動いていく。同時にぷちゅっ、という音が響き、妖夢の秘所からは愛液が溢れ、太ももを伝って机の上に落ちていくのだ。

熱い、妖夢の腸内、熱い。
もう快楽に思考を預けてしまった幽々子の腰は激しく動く。
私の我儘の為にわざわざお腹のお掃除もしてくれて、さらには苦しいのに全部飲み込んでくれて。

愛しい。愛しい。愛してる。
妖夢、愛してる。

幽々子は目の前で自らの手を握りしめながらも彼女のモノを受け入れる妖夢を激しく突きながらそんなことを考えていたが、いつしか思考は無意識のうちに言葉に変換されていく。
「すき、よーむ、あいしてる、あいしてる！」
口を半開きにさせて、獣の様に犯しても、口から出てくる言葉は妖夢に対しての愛情たっぷりのもの。

「私も、愛しています、幽々子せんぱい…ああ、ああん！」
根元までぐっぷりと飲み込みながら、どんどん滴り落ちていく愛液、そして愛欲に塗れる妖夢の口からも同じ様に愛の言葉が溢れ出てくる。

「ああ、だめ、出る、よーむの中に、出ちゃう」
「いい、ですよっ、せんぱいの…下さい！」
「ごめ、ん、なさい、出しちゃう、いっぱい、あ、あ、あああ！」
その言葉と同時に幽々子の動きが止まり、妖夢の腸内に大量の精液が注ぎ込まれる。
「ああああ…幽々子せんぱいの、ザーメンが…あふぅ」
幽々子の手を握りしめたまま机の上でガクガク震える妖夢の表情はもうとろとろで。同時にあっあっあっ、と喘ぎ声を上げてぱちゃぱちゃという音を響かせながら潮を噴いてしまい、彼女の下半身は蜜が漏れていく。

妖夢の腸内に自らの精を搾り取られていく感覚だけでも狂う程気持ちいいのに、さらに彼女が自分の射精で潮吹きまでしてしまう…そんな妖夢の痴態を見て我慢出来るはずもなく。
「ああ、また、出ちゃうわ…！」
嬉しそうな表情を浮かべながら、まだ勃起を持続していたペニスから再び大量の精液が噴き出し、妖夢のセーラー服とスカートを白濁色に染めていく。その姿すら快楽に変換されてしまい、幽々子は堪らず近くの椅子に座り込んでしまった。
「あふ、う…。すごくお腹がいっぱいです…」
ザーメン塗れのセーラー服姿の妖夢は幽々子の傍に座って、自分の少しぽっこり膨らんだ下腹部を愛おしそうに撫でながら彼女を見つめる。
そして白く染まった妖夢の姿に再び大きくそそり立っていく幽々子の男性器を彼女は見逃さない。

「でも、幽々子せんぱいのここはまだ足り無さそうにしてますよ？」
そう言って今度は勃起した幽々子のペニスをしゅこしゅこ扱き始めていくのだ。
「あ、やだ、さっきイッたばかりなのに…」
「またイッちゃうんですか？」
耳元で囁かれると幽々子は真っ赤な顔をして頷く。
「あんなに出したのに…またカウパーがだらだら出ちゃってます」
「そんなこと言わないでぇ…」
妖夢の言葉の通り、あれだけ大量に出したにも関わらず、幽々子のペニスは先程と変わらない程の大きさにまで戻っていた。その一物を妖夢はくちゅくちゅと淫靡な音を立てながら

彼女のペニスのカリや先端を丹念に攻めていく。
さらにある程度攻めると今度は激しく手を上下に動かして全体を愛撫する。そんな彼女の攻めに、幽々子が我慢出来るはずがなかった。

「あっあっあっ、また出る、妖夢の手で、また、出るっ！」
彼女の情欲に塗れた言葉と同時にびゅっ！と濃厚な精液が大量に噴き出し、幽々子の顔や身体にも降り注いではまだ綺麗だった紺色セーラー服とスカートをまるで妖夢の様に白く染めていく。
「幽々子せんぱいも私と同じになっちゃいましたね…嬉しいです」
「よーむぅ…」
そう言ってお互い顔を見つめ合って、そのピンク色の唇を交わす。彼女のセーラー服も自らの精液で白く汚れ、さらにキスをした瞬間に女の子の部分も達してしまい再び絶頂失禁をしてしまう。
「〜〜〜！！」
声にならない絶頂の喘ぎ声を漏らす幽々子。同時にちょろちょろ音を立てて床に落ちていく尿蜜は彼女のスカートを余すところなく濡らし、先程の妖夢の様に綺麗な紺色セーラー服はもう取り返しのつかない状態になってしまった。
「ぷあっ…。せんぱいのそんな淫らな姿を見て、私も我慢出来なくなりました」
そう言うと妖夢は自らの身体を仰向けにして机に寝そべり、両足を広げながらもう下着の役目を果たさなくなったびしょびしょの生地をずらしてぐちゅぐちゅに熟れた自らの花弁を幽々子に見せ付ける。

「幽々子せんぱいのおち〇ちん、私のお〇んこに…入れてください」
目を潤ませておねだりをする妖夢の姿に幽々子は微笑みながら覆いかぶさり、何度目かの勃起したペニスを彼女の蜜壺の中に挿入していく。
「あっ、ああっ、あっ」
ぐにゅうぅぅぅ…と柔らかい肉が幽々子を飲み込んでいく。ぬめぬめとした肉の襞、きつすぎず緩すぎず、幽々子のペニスにジャストフィットした膣内。
そんな快楽に塗れた幽々子のペニスはさらなる快感を求めて、自らの腰を徐々に激しく動かし始めていくのだ。

「あんっ！ゆゆこせんぱい、おおきい…！」
幽々子のペニスがひと突き、またひと突きと子宮の奥まで犯す度に妖夢の身体は快楽に溺れていき、その度に噴き出す蜜がお互いの下半身を濡らしていく。
「ようむの、なか、きもちいい…溶けちゃいそう」
ぶちゅっ、と淫靡な水音を立てながらも幽々子の腰は全く止まることは無い。

淫らに悶えながらお互いの手を結びあって、その唇を再び交わす。ぴちゃぴちゃという唾液の絡む音、舐り合う舌、その歯をなぞると2人とも甘い吐息を漏らして。
「ゆゆこせんぱぁい…これ以上激しいと、私、もうイッちゃいます」
「良いわよっ、妖夢…！イッて、私も、もうイッちゃうからぁ」
妖夢の肉襞の感触に幽々子の絶頂感が一気に襲い掛かってくる。それでも止まらない腰の動き、同時に漏れる嬌声。
「らめぇ、よーむのなかで、また、出ちゃう」
「ゆゆこせんぱい、いっぱいわたしのなかで、出してくださいぃ…！せんぱいの、ザーメン、たーくさん下さいぃぃ」
快楽に染まってしまったのか、呂律が回らなくなってる2人はそれでも激しく絡み合い、愛液を垂れ流してはお互いの身体とセーラー服を汚していく。

「だめ、イク、よーむの、なかで…イクぅぅぅ！」
「ゆゆこせんぱい、せんぱい…！私も、イッ…くぅぅぅ！」

教室に響く喘ぎ声と共に彼女たちの身体が大きく震えて、止まる。
びゅくーっ！という擬音が相応しい程の精液が妖夢の蜜壺に注ぎ込まれて、止まらない射精と絶頂による潮吹きが繰り返される。その快楽に幽々子の下半身が耐えられなくなったのか、膀胱内に残っていたおしっこが一気に漏れ出していくのだ。
「あひゃあ…また、おしっこ出てるぅ」
びちゃびちゃと音を立てて再び失禁してしまう幽々子。
「ああ…ゆゆこせんぱいの、ザーメンがいっぱい…！」
妖夢もまた絶頂感に包まれながら、情欲に塗れた、いわゆる『アヘ顔』になった幽々子を優しく包み込んで、再び激しくキスを交わす。

「ああ、幽々子せんぱいの、ザーメンが漏れちゃいそうです…」
はぁはぁと荒い息を付く幽々子を床の上に仰向けで寝かせて、その上に馬乗りになる妖夢。
「だから…せんぱいにも、『お裾分け』しちゃいますね」
娼婦の様に淫らな微笑みを浮かべてべちゃっ、と幽々子の精液塗れのスカートの上に座り込む。

「ああ、もう我慢出来ません…！幽々子せんぱいの上で、はしたなくザーメンお漏らしをしちゃいますぅ…！」
「良いわよ妖夢…いっぱい出して…私のセーラー服も、妖夢で、汚してぇ！」
幽々子の股間があれだけ射精したのにスカートの中でどんどん膨らんでいく。
「幽々子せんぱい、だめ、出ます！せんぱいを…汚しちゃいますぅ！」
ぐりゅぐりゅ！とお腹から不穏な音が聞こえたと思った瞬間。
ぶびゅびゅびゅりゅりゅりゅっ！ぶしゅうぅぅぅぅ！
「ああ、出てる！幽々子せんぱいの上で、ザーメンおもらししながら、イく、イっちゃうぅう！！！」
腸内に注ぎ込まれていた大量の精液が一気に排出されて、妖夢の精液塗れのスカートの裾から白濁液が大量に溢れては幽々子のセーラー服に広がっていく。
さらに膀胱に溜まっていた泉が決壊して、絶頂と同時に漏れ出して、愛液と混じって温かい液体となって溢れ出す。すでに精液と愛液塗れだった妖夢のプリーツスカートは尿蜜で濡れ、吸収しきれなかった残りが幽々子のお腹から下半身に染み込んでいく。
そして噴き出したザーメン浣腸液も幽々子の既に精液塗れになっていたどろどろのスカートを再び白く汚し、まるで生クリームを掛けたかの如く真っ白に変色していった。
「ああ、妖夢の、温かい…！だめ、出てる、よーむのお漏らし浴びて、出ちゃった…」
全身を精液に塗れ、栗の花の香りを振り巻く幽々子。失禁の快楽に悦びの表情を浮かべながら精液でところどころ白く染まったセーラー服や精液と尿蜜の混じったもので白に濃紺が混じった色に変色したプリーツスカートに自らの腸内から零れた精子をさらに塗り付ける妖夢。
そんな彼女の出したものを浴び、淫らに乱れる姿を見て堪えきれなかった幽々子のペニスは成すすべもなく射精してしまった。
尿蜜とザーメン塗れのスカートの中でびゅくびゅくと精を吐き出しながら声にならない喘ぎ声を上げて快感の海に溺れていく幽々子は上気した表情で『よーむ、すきぃ…』と甘く蕩けた声を呟くのだった。
「ああ、ゆゆこせんぱい…あいして、います…」
蕩けた表情で幽々子を見つめる妖夢の口から漏れる愛の言葉。
「私もよ、妖夢…愛しているわ…」
お互いのセーラー服を見るも無残な状態にさせて、中も外も精液塗れになりながらもその姿を慈しみ、悦び合う2人。
夕暮れだけが、乱れ合った2人を祝福するかの様に照らしていたのだった…。

あとがき　1／3

おっきーいいよね…表向きはイケメンでキリッとしてるのに二童子たち身内だけになるとだらけたりするおっきーいいよね…
そんな二人からエロいことされても怒らずになんだかんだで付き合っていったりする優しさ持ってるのもいいよね…
そのあとおっきーから二童子とすけべを求めるようになる
おっきー可愛いよね…

いとひろいち

ぶっかけ…エロいですよね。
ドロドロにしちゃうぞー…と息巻いたはいいものの、
「ぶっかけられてるのがエロいのか、ぶっかけられた後がエロいのか、どっちなんだ？」
という悩みが生まれました。まだ答えは出てませんが気づかせてくれたことに感謝です。
楽しんでいたがければ幸いです。ではではー。

るぅる

ぬわわわ、どうも奈津みかんです。
例のごとくプリズムリバー三姉妹のお話で。
こんなえちえちな合同に参加させていただけて光栄です。

突然ですがネバいザーメンっていいですよね。(突然
ぶっかけがいのあるザーメンを描こうと思ったらいつもより
ねばねばになってしまった感。だがそれがいい。

奈津みかん

ちんちんたくさんかけたのでまんぞくです。

定宏

合同参加のお誘いありがとうございました！
ぶっかけるなら黒の衣服にかけたいよね…と思ってルーミアちゃんにしました。
ショタ喰いビッチにしてみましたがこういうルーミアちゃんもいいよね…

あず

あとがき　2／3

ところで自分声優の田村ゆかりが好きなんですが
最近？の活動何してるのか調べたら
東方キャノンボールでレミリアのCVやってるらしいですね
薄い本のお嬢様がゆかりんボイスだと思うとこれまでより256倍シコいですよね
このあとがきお燐と関係ないやんけ

カワシ

大型熊猫です。
普段は人が死んだり人が死んだりする話しか描いてないので今回は純愛書けて楽しかったです。
ぶっかけですけど。
でもぶっかけ好きなんでＯＫです！

大型熊猫

この度は合同に参加させていただきありがとうございました…！
着衣ぶっかけ、いいですよね。寝てるとことかに不意打ち気味にしたりとかもいいよなぁと思った結果おっぱい見る間もなく暴発しちゃった感じになりましたがそれはそれで。
優しい小傘ちゃんはきっと寝たままのふりをしながら二発目を待ったりしてくれると思います、そうであってほしい。

ドリアン

久しぶりに思う存分男汁をぶっかけました！！
ふぅ…
ぶっかけ以外の性癖も入れ込んでしまった気もしますが
抜いていただければ幸いです！
あっ！！他の参加者さんのぶっかけもえっちっ！あっ！びゅっびゅっ！
ふぅ…

ひっつ

今回もにっちでエッチな企画に参加させていただき大変楽しく
原稿ができました！！
着衣ぶっかけはいいぞ

保留中

あとがき　3／3

全身ザーメンまみれで往来を歩いても平気！
そう、ぬえちゃんならね(＾ω＾)
このたびは参加させていただきありがとうございました

てぃんばー

見抜きとぶっかけを文句言いながらも承諾してくれるナズーリンが彼女にほしいって気持ちを原稿にぶつけました。

ダイチ

この度こいしちゃんにぶっかけました五郎丸です。
こいしちゃんはナチュラルに精液好きそうなので、こいしちゃんのペット(精液製造機)になれるよう日々精進(精液促進)していく所存ですので何卒よろしくお願い申し上げます。

五郎丸

初めまして、特殊性癖満載エロ物書きのhoyohoyoです。
今回は自分の性癖を盛り込んだ作品が書けたかな、と思います。
この素敵な合同誌を企画して頂いた誤汰吉様、最高の挿絵を描いて頂いた鳴海也様(https://twitter.com/narumiya_safe)、
そしてこの作品を見て下さった読者の皆様に最大の謝辞をば。

hoyohoyo

主催者あとがき

本合同誌をお手にとっていただきありがとうございます。
東方着衣ぶっかけ合同主催、誤汰吉です！

妙なトコロを突いていく合同企画第三弾！いかがでしたでしょうか？

今回は妙とはいえ、ぶっかけです。まぁ一般性癖ですね。
異論は認めないし、騎士以外の発言は許可しません。

参加者各位の巻末コメントが相変わらずキマり気味なあたりも一般的と言えるでしょう。

私は今回早苗さんなわけですけど、実際のところ早苗さん本は前から出そう出そうと
ずっと思ってはいたんですね。
諸般の事情(他の描きたさを優先した)により合同誌でやっとこさ、といったところです。
やはり早苗さんにはSHINJAのMURABITOにぶっかけられる姿が美しい！
一番好きなハンバーガーです！

今回は途中途中でダーク♂ページ余りがあったんでイラスト載せときました。
雛様もこころちゃんもボクは好きなんだ！

そんなこんなで。
またそのうち面白い企画考えついたら実行しますんで、よしなに。

それではみなさま、世にエロスのあらんことを。

主催者 近影

奥付

東方着衣ぶっかけ合同
-めんこい女子にゃそのままかけろ！-

2020年 10月 11日　初版発行

（第16回 東方紅楼夢）

発行：ごたさんのエンタイトルツーベース

編集：誤汰吉（ごたさんのエンタイトルツーベース 代表）

連絡先：g.entertainment2048@gmail.com

印刷・製本：株式会社　栄光 様

参加者(敬称略)

いとひろいち
るぅる
奈津みかん
定宏
あず
カワシ
大型熊猫
ドリアン
ひっつ
保留中
てぃんばー
ダイチ
五郎丸
hoyohoyo & 鳴海也

主催　誤汰吉

G's Entitled 2 -base hit !

ごたさんのエンタイトルツーベース

合同企画 Vol.3

Touhou Project Fan Book